広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要
〈第41号　2013．3〉

小学校における国際交流と連携した口腔衛生への気づきを生むプログラムの開発

― 歯学部国際歯学コース学生との交流を通して ―

後藤美由紀　　岡　　広子　　天野　紳一　　高田　　隆

１－１．はじめに

グローバル社会で活躍する人材には，自分自身をしっかりと見つめ，多様さに対して寛容な態度をとりながら，世界に貢献できる能力が不可欠である。社会の国際化やグローバル化に伴い，学校教育でも多様な角度から自己理解と他者理解の資質や能力，態度を育む内容が必要となってきている。広島市内に位置する広島大学附属東雲小学校では，平成18年度から，「日本と異なる文化や言語に対する気づきを生む学習内容の充実」に重点を置いた外国語活動に取り組んでいる。

同じく広島市に位置する広島大学歯学部では，グローバル化対応能力育成のため平成23年度より海外協定校との連携の下，国際歯学コースを開始した。急速に進展する歯科医療の国際化の中で，グローバル化に対応する能力の育成とアジアにおけるネットワークの基盤形成を目的として，日本人と外国人がともに歯学専門教育を学ぶ教育体制となった。従来の歯学教育に加えて日本人と外国人留学生がともに学びあう過程で，将来社会で活躍するために必要な能力を培おうとしている。外国人学生と日本人学生との単なる交流促進にとどまらず，霞キャンパス外の地域社会と関わりをもち，外国人学生と日本人学生が協同した活動の実施を通して，地域と連携しながら相互理解を深めて広く「国際化」を図ることも歯学部が企図するものの一つである。現在に至るまで，外国における医療支援活動の一部に学生が参加するという取り組みはあったものの，日本における両者の協同した歯科保健活動実施は未だ実現していなかった。

１－２．国際歯学コースとは

本コースではインドネシア，ベトナム，カンボジアの協定歯学部からの学部生が，広島大学歯学部で特別聴講学生として日本人歯学部学生とともに歯学部の歯学専門プログラムを日本語と英語を用いた「dual-linguistic education system」で４年間にわたり学ぶ。外国人学生は母国歯学部で１年間学んだあと，広島大学歯学部において４年間専門歯学科目を学び，その後母国の大学に戻って臨床実習とそのほかの必要科目を学んで母国の歯科医師国家試験を受験する。広島大学での４年間のプログラムを通し，外国人学生および日本人学生がお互いの理解を深め，さらに高い自分たちの可能性に気付くことが期待される。

２－１．研究の目的・方法

本研究は，児童と国際歯学コース学生を主体とする歯学部学生との食事や口腔保健を織り交ぜた交流を通して，児童の「伝えたい」というモチベーションを向上させること，異なる文化を理解するきっかけを与えること，自己理解を深めることを目的として企図した。

対象は，５年生単式学級（５－１）および複式高学年学級の児童とした。歯学部からは，歯学科２年生とともに学ぶ国際歯学コース外国人学生（以下，留学生とする）３名（インドネシア人２名，ベトナム人１名）および歯学科２年生の日本人学生３名が参加した。留学生１名と日本人学生各１名からなるグループを３グループ形成し，９月と２月の計２回にわたる児童と学生の交流会を企画した。交流は外国語活動の時間と給食時間を含めて約２時間とした。第２回は平成25年２月実施予定のため，今回は第１回の内容を主に基づいて述べる。

第１回交流会前に，対象児童には各国に対するイメージに関してアンケート調査（表１）を行い，その結果に基づいてクラスごとの交流会の内容（表２－１，２）を決めるとともに，学生グループそれぞれが留学

Miyuki Goto*, Hiroko Oka*, Shinichi Amano, Takashi Takata, Development of New Oral Health Program for Elementary School Students which Collaborates to International Communications　―Through the Exchange Program with International Dental Course Students―　*These authors contributed equally to this work.

生の母国（インドネシア，ベトナム）の地理や文化を紹介するプレゼンテーションを作成した。なお，表１に挙げたはじめの５項目は歯学部からの提案に，最後の１項目は小学校からの提案に基づいた項目である。児童側の交流の効果をはかる目的で，第１回交流会後に記述式アンケート調査（表３）を実施した。

また，表２の「内容３．留学生のみなさんから」はグループにわかれての活動であったため，質疑応答を共有する目的で交流会後歯学部のホームページ（http://icdd.hiroshima-u.ac.jp/）に内容を掲載して公開した。

さらに第１回交流会後，広島大学霞祭において国際歯学コースをはじめとする歯学部学生による展示が企画され、交流会に参加した学生も関わる企画であったため，歯学部からパンフレットを送付してもらい，児童への周知を図った。

２－２．留意した点

児童が主体的に取り組むことができるよう，交流会の事前アンケート「９月28日の交流会をどんな時間にしたいですか？自由に書きましょう」への回答を基に活動内容を組み立てた。また，交流会に参加する留学生は交流会の時点で英語でのコミュニケーションに問題はないが，日本語については「簡単なあいさつが話せ，ひらがなとカタカナが読める」という段階であった。さらに，日本の小学校および児童に対する知識も不明であった。一方，小学校側からの事前準備，連絡は基本的に日本語を用いて行われていた。そのため，交流会の準備や当日の進行に際して日本人学生と留学生とをペアとし，事前の情報伝達や当日の急な状況変化に十分対応できるように配慮した。

表１　交流会前アンケートの項目（児童用）

「日本」と聞いて，思いつくものや事を書きましょう （食べ物，スポーツ，イメージ，場所，人物など何でもいいです）
「インドネシア」という国を知っていますか **知っている・名前を聞いたことはあるがよく知らない・　知らない** **(^-^)　f(^^)　m(_ _)m**
「インドネシア」と聞いて，思いつくものや事を書きましょう （食べ物，スポーツ，イメージ，場所，人物など何でもいいです）
「ベトナム」という国を知っていますか **知っている・名前を聞いたことはあるがよく知らない・　知らない** **(^-^)　f(^^)　m(_ _)m**
「ベトナム」と聞いて，思いつくものや事を書きましょう （食べ物，スポーツ，イメージ，場所，人物など何でもいいです）
9月28日の交流会をどんな時間にしたいですか？自由に書きましょう。

表２－１　第１回交流会プログラム（５－１）

月日	平成２４年　９月２８日（金）
学年	第５学年１組　　３６名
場所	東雲ホール
学習活動と内容	**第３校時（10:45～11:30）** １．留学生のみなさんをお迎えする（5分間） ・ お迎えのパフォーマンス「南中ソーラン」 ２．自己紹介ゲーム（5分間） ・英語を使ったジャンケンをし，勝ったら自己紹介を交わし合う ３．留学生のみなさんから（１５分間） ・ベトナム，インドネシア，それぞれの国についての紹介を聞く ・質疑応答 **給食** インドネシア人学生１名，ベトナム人学生１名，日本人学生２名 **昼休み** ・ 音楽室等で各自交流

表２－２　第１回交流会プログラム（複式高学年）

月日	平成２４年　９月２８日（金）
学年	複式高学年　１６名 （交流会当日は１名欠席のため１５名）
場所	東雲ホール→家庭科室
学習活動と内容	**第４校時（11:40～12:25）** １．留学生のみなさんをお迎えする（5分間） ・ お迎えのパフォーマンス「AKB48のダンス」 ２．自己紹介ゲーム（5分間） ・ 英語を使ったジャンケンをし，勝ったら自己紹介を交わし合う ３．留学生のみなさんから（１０分間） ４．みんなでともにactivity（２５分間） ・“お月見”の紹介 “お月見”にちなみ，白玉だんごを一緒に作って食べる（家庭科室に移動） **給食** インドネシア人学生１名，日本人学生１名 **昼休み** ・音楽室等で各自交流

表３　交流会後アンケートの項目（児童用）

この時間に，何を伝えることができましたか?
交流してみて，何が必要だと思いましたか?
これからどんなことを勉強すればよいと思いましたか?

３．成果と課題

第１回交流会のための準備や当日の内容に対して自ら積極的に取り組む児童が多くみられた。事前のアンケート等を基に，交流会の内容を児童が主体となって決めることができたことが一因と考えられる。さらに，交流会後の給食や昼休みの交流では留学生と打ち解け，校内を案内したりともに遊んだりしていた。これらの状況から，第１回交流会は，児童の「伝えたい」というモチベーションを向上させるきっかけになったと推察される。また，事後アンケートの結果で，交流会をもった２クラスの児童がともに語学以外の国際コミュニケーションに関する項目に気づきが得られていたことから，今回の交流会が国際的なコミュニケーションについて別の角度から気づくきっかけとして効果があったと考えられる。

一方，学生側も留学生と日本人学生をペアとしたことで児童との交流に有効な内容を工夫して実現することができた。例えば，当初教員間のみの事前調整では予定になかった民族衣装での参加や，母国の紹介に学部の講義や演習で用いられている「dual-linguistic education system」を基本に母国語を取り入れたプレゼンテーションの構成である。この協同した活動は，学生間でも相互理解を深めるきっかけとなったと推察される。

課題としては，留学生が事前アンケートからの児童の興味関心について応えようとプレゼンテーションの内容が豊富になりすぎたため，留学生が話をする時間が長くなり，児童からの質問等に答える時間が少なくなった。この点については，プレゼンテーションを説明だけではなく発問を多く含んだ内容にしたり，電子黒板ではなくiPadのようなコンパクトな機器を使ったりすることで，物理的にも近い距離で，会話の多いコミュニケーションが行えるようになるのではないかと考える。あるいは，児童と学生が一緒に何かに取り組むワークショップ形式の比重を高めることも有効かもしれない。

給食に関して，今回は偶然にも交流会当日が「お月見」特別献立であったこと，また豚肉を使用しない献立にしたことが，給食を介した交流に役立った。

また，別の課題としては，時間の設定が挙げられる。今回45分の外国語活動の時間を利用したため，交流会の予定の段階で色々な活動を取り入れるためには余裕のない時間配分となった。そのため，第１回の時間内ではまず国際交流の導入として，自分たちで何かを伝えることと相手の国についての理解のきっかけづくりとなる内容とした。その中で，給食の時間を共有できる構成としたこと，学生が「歯」をかたどったネームプレートやイラストを自分の紹介内で積極的に使用したことが今回「口腔衛生への気づき」に対して働き掛けるために行えた工夫である。今後，口腔衛生への気づきを生む要素は，交流会への直接的な組み込みだけではなく，歯学部が関係している大学祭やデンタルキッズなど交流会以外の間接的な要素を積極的に紹介していく方法も検討したい。なお，第１回交流会後に広島大学霞キャンパス内で実施された「霞祭」（平成24年11月10，11日）への児童参加は３名であった。

第一回交流会については，児童や学生は準備した内容を消化するのに精いっぱいという感があり，小学校側の時間調整に手間取ったり準備が不十分であったりした。児童および学生が準備や片付けにもある程度参加するために，45分という１校時ではなく，準備期間としての取り組みまでの授業時間や，交流会の時間について，より長い時間枠の設定の可能性を探る必要も痛感させられた。

今回，日本人学生と留学生のペアとすること，留学生がある程度日本語を理解できる状況であったこと

児童によるお迎えのパフォーマンス「南中ソーラン」（５－１）

国際歯学コース留学生と歯学部学生による各国の紹介（写真：ベトナム）

白玉だんご作りの様子（複式高学年）

は，児童が自分たちで何かを伝えることと相手の国についての理解のきっかけづくりとして有効であった。その一方で，今後日本語が通じない状況を想定した成果を期待する場合は，ありきたりではあるが交流会時間内はまず教員自らが日本語を使用しないように心掛ける必要性を感じた。第１回交流会では，児童や学生が日本語を使用しないようにしていても，間を取り持つ教職員が無意識のうちに日本語を使用して留学生とコミュニケーションを図ってしまうため，そこを起点に日本語コミュニケーションが始まりがちであった。今後は，日本語を使用せず進められるような構成も検討したい。

４．事前アンケート結果

留学生の母国についてほとんどの児童が名前だけは聞いたことがあるという状況であった（図１）。その一方で，各国について思いつくものや事に対する回答を見ると，日本に対する回答に比べインドネシア，ベトナムに対する回答は半数以下であった（結果非表示）。また，インドネシアとインドを混同した回答も散見された。これらの事前アンケートの児童からの回答は学生たちの紹介部分の内容や方法を検討するために大いに役立った。

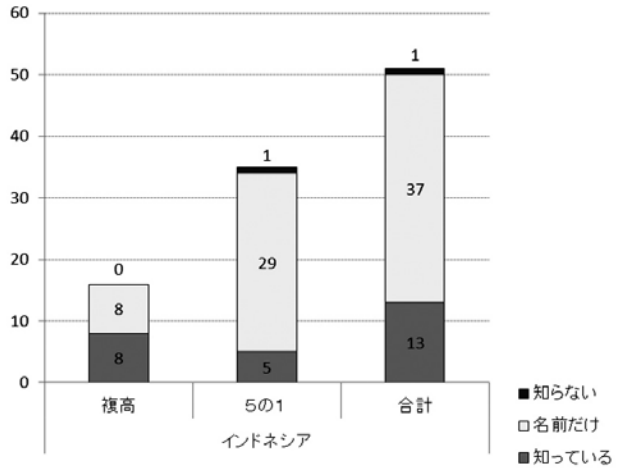

図１－１　交流会前アンケート結果
「インドネシア」という国を知っていますか

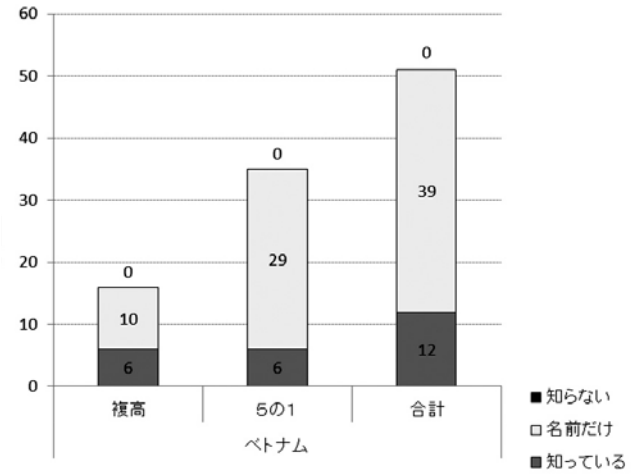

図１－２　交流会前アンケート結果
「ベトナム」という国を知っていますか

５．事後アンケート結果

「この時間に，何を伝えることができましたか？（表４）」という問いかけに対し，「南中ソーラン」を披露した５－１では「日本の踊り，ソーラン節」を，「白玉だんごづくり」を行った複式高学年では「日本の国，文化，食べ物」あるいは「お月見」に該当するものを挙げた児童が多かった。また，折り紙や給食などは授業以外の時間に学生たちと関わった内容と推察される。これらの回答は，自らが取り組んだことについて，児童らがそれなりの達成感を得たことを物語っていると考えられる。

「交流してみて，何が必要だと思いましたか？（表５）」「これからどんなことを勉強すればよいと思いましたか？（表６）」との問いかけに対して，「英語」あるいは「外国語」に該当する回答が多かったのは外国語活動の時間を利用したことも理由の一つとして考えられるが，児童らが留学生とコミュニケーションをとる際に困難さを感じたことも大きく係わっていると思われる。その一方で「他国の知識・挨拶」といった相手への理解の必要性や，「話しかける・質問する勇気，積極性」，「伝えようとする気持ち，伝える力」など語学力だけではないコミュニケーションの能力に関する項目にも該当する回答が認められた。

表４．この時間に，何を伝えることができましたか？

	５－１	複高
日本の踊り，ソーラン節	33	
折り紙	14	
じゃんけん	1	
給食	1	
自分の名前	1	
日本・東雲小の子どもたち	4	1
日本の国，文化，食べ物	5	11
日本語	5	2
和太鼓・剣道		1
お月見		7
白玉・団子		2
AKB		2
歌は昔からつながっている	1	

表６．これからどんなことを勉強すればよいと思いましたか

	５－１	複高
外国語，英語	26	11
外国の特色・外国について	20	5
日本について	1	
折り紙	1	
手話		2
くじけないやる気		1

表５．交流してみて，何が必要だと思いましたか？

		５－１	複高
コミュニケーション	英語力・英会話力	28	8
	話しかける・質問する勇気，積極性	4	2
	伝えようとする気持ち，伝える力	1	3
	相手の言っていることを理解する，聴き取り力	2	1
	フレンドリーな心，すぐ打ち解けるよう努力する力	1	1
	いろんな人とかかわること	2	
	いろんなことを受け止めること	1	
	ありがとう・ごめんね・こんにちはが必要なこと	1	
知識・国際感覚	他国の知識・挨拶	8	2
	国と国とのつながりがよくなること	1	
	挨拶の言葉	1	
	自分の国のこと	1	1
	愛国心	1	
	平和	1	
手段等	手話・ジェスチャー	1	3
	英語が使えなくても無理やり話すこと		2
	テンション		1
その他	名前・ネームプレート	3	
	交流会のスムーズさ	1	

６．第２回交流会準備状況

第１回交流会と同じ児童を対象として，各クラス１時間と給食時間を使用した第２回交流会を平成25年２月22日（金）に実施予定である。

第２回交流会は，第１回交流会の結果を踏まえ，校時内での内容はジェスチャーゲームを応用したオリジナルカルタ遊びに絞り，より小さなグループで活動することにした。

オリジナルカルタについては，留学生・日本人学生と児童の両方が口や歯に関わる言葉，自国の民族衣装や年中行事などの文化に関わる言葉を考え，絵札を作成する活動を事前準備とする。その過程で，児童にとっては学生に「伝える」という要素を積極的に取り入れながら口腔保健に関わる意識も高まることが期待でき，学生にとっては共同作業の中で日本人学生・留学生の理解が深まることが期待できる。

また交流会の中では，児童・学生の双方が「自分の英語が伝わった」という達成感を持つことができるよう，準備を進めている。

７．おわりに

本校児童と歯学部学生の初めての国際交流会は，自分たちで何かを伝えることと相手の国についての理解のきっかけづくりとして有意義なものであった。特に，児童が語学だけではないコミュニケーションの方法や，自国や他国の理解の重要性に気づく機会となる可能性を改めて実感することができた。その一方で，口腔衛生に関する直接的な要素を第１回交流会では積極的に取り入れることができなかった。これは，本校における口腔保健に関する保健指導を定着させるという課題に結び付くと考える。

現在，国際歯学コースが開始されている学年は歯学部の低学年である。第１回交流会を糸口として，今後口腔衛生活動を絡めた第２回以降の継続的な交流を通し，国際交流と連携した口腔衛生への気づきを生むプログラムの開発につなげていきたい。

参考文献

１）林義樹（1994）学生参画授業論―人間らしい「学びの場づくり」の理論と方法　学文社

２）林義樹（2002）参画教育と参画理論―人間らしい『まなび』と『くらし』の探究　学文社

３）関田一彦，安永悟（2005）協同学習の定義と関連用語の整理．協同と教育；1：10－17.

４）広島大学歯学部Guide Book 2011（2011）広島大学歯学部

５）清水和久，益子典文（2009）小学校における「自律型国際交流学習」の特徴とそのデザイン―国際交流学習の実践事例の類型化に基づく特徴の明確化―．岐阜大学カリキュラム開発研究；27：90－99.